

「かごしま茶」振興ビジョン（仮称）検討委員会（第2回）
議事概要

1 日 時

令和8年8月27日（木）午後1時30分から午後3時15分まで

2 場 所

かごしま茶流通センター（鹿児島市）

3 出席委員

吉野委員、光村委員、永田委員、田原委員、坂之上委員、前原委員、岡村委員、西委員、
上永田委員、石橋委員、長船委員、木下委員、大平委員 計13名

4 概 要

鹿児島県農産園芸課から資料に基づき、「かごしま茶」振興ビジョン（仮称）の骨子案について説明した後、意見交換。

委員からの主な意見の概要は以下のとおり。

（鹿児島県経済農業協同組合連合会・吉野委員）

3ページからの「振興方策」について、我々が色々と申し上げた意見をかなり反映していただいているので、重複箇所の「集約」という部分もあると思うが、概ねこの方向性で良いと考えている。

その上で、2～3点ほど付け加えさせていただきたい。

3ページの「(5) 研究開発」について、現在、有機栽培やてん茶の需要は非常に伸びているところだが、てん茶栽培に必要な長期被覆により樹勢の低下が懸念されるため、

「てん茶とせん茶のローテーション」などの分野で研究開発が必要と考えている。「有機栽培てん茶の生産体系の確立」などの文言を追記いただきたい。

次に4ページの「3 加工・流通高度化の推進」のうち、「かごしま茶のブランド化」について、現状、品質の面での「ブランド化」とした文脈が強く打ち出されているが、お茶作りにおける「ストーリー性」という視点も必要と考えている。

例えば、本県には、桜島、開聞岳、霧島といった火山があるが、お茶は「火山灰土壌」や「酸性土壌」で育つ特徴があるため、鹿児島県はお茶の栽培に適した環境であるというストーリーとして紹介してほしい。

また、鹿児島は畜産業が盛んであり、牛や豚などの堆肥を活用した土作り（土壌改良）が進んでいる。こうした鹿児島ならではのストーリー性を整理していただき、ブランド化の取組の中に位置付けられないか。

最後に、4ページの「(7) 安心・安全で環境に配慮したお茶づくりの推進」について、これまで鹿児島県が取り組んできた「クリーンなお茶づくり運動」は、かごしま茶の大きな

強みであると考えているのでこの表現を復活していただきたい。

（公益社団法人鹿児島県茶業会議所・光村委員）

全体を通して、非常に良くまとまっているという印象を受けた。

我々茶業界として推進している様々な施策と合致していると感じている。ほぼ全ての要素が網羅されていると受け止めており、特に大きな異論はなく、この方向性で進めてよい。

今後整理していく上で、「需要予測」は、特に非常に難しい分野だと思うが、「国内」と「国外」で異なるトレンドを見せられているため、分けて予測値を出していただきたい。

また、5ページの「5 消費拡大・文化」では、「かごしま茶いっぺの日（毎月18日制定）」という新しい取り組みが記載されており、県が旗振り役となってかごしま県民運動を展開する意気込みを非常に心強く感じている。

（特定非営利活動法人鹿児島県有機農業協会・永田委員）

3ページと5ページに「有機栽培茶の生産効率化に資する機械の開発・導入」と同様の記載があるが、これらは、除草作業を効率化するための「乗用型草刈機」などの機械開発・導入という理解でよいのか。

5ページの「有機栽培茶園の団地化」については、前回でも提案したが、霧島地区などでは茶園の団地化が非常に進んでいるので、ぜひこうした取組をさらに推進していくという旨を文言として明記していただきたい。

（坂口かごしま茶振興監）

骨子案に記載されている「有機栽培茶の生産性効率化に資する機械の開発・導入」については、貴見のとおり。

（一般社団法人鹿児島県茶生産協会・田原委員）

全体として非常に素晴らしい内容に仕上がっていると感じている

このビジョンを遂行していく上で最も重要な点は、いかに生産性を維持し、安定的な栽培・生産体制を構築できるかと考える。

その生産体制の担い手となる人材の確保が非常に重要だが、現在の生産現場では高齢化が著しく進行しており、高齢化に伴う離農者の増加や、その経営基盤の継承などの課題に直面している。

また、労働力不足が深刻であり、日本人の人員確保も極めて厳しい状況にあることから、外国人人材に依存する現場が増加している。

こうした状況において、外国人就労人材をいかに速やかに生産現場へ受け入れていくかが課題となっている。現在、入国管理の進捗や手続きに時間を要している現状もあるため、よりスムーズに受け入れができるような体制づくりや連携が必要ではないか。

なお、栽培の効率化・生産性の維持・向上に向けては、土づくりや肥料の施肥方法の工夫

などの技術的アプローチもあると思うので、技術革新や新技術の開発・導入も視野に入れて進めていただきたい。

他方、4ページの「(7) 安心・安全で環境に配慮したお茶づくりの推進」の「安心・安全」は、最も重要な土台の1つと考える。どのような状態が「安全」で、どのようなアプローチが「安心」に繋がるのかを明確化し、その具体的な中身を記載していく必要があると考える。

(鹿児島県茶業女性の会・坂之上委員)

私は、8ページにあります「(5) 推進体制の構築」という図が非常に分かりやすく、素晴らしいと感じた。これを見ると、関係者が一丸となって「これからのかごしま茶を盛り上げていこう」という連帯感が醸成される図式になっており、横の繋がり的重要性を改めて認識した。

お茶を飲む人口(消費機会)が減少しているという課題はあるが、未来へ「かごしま茶」を繋げていくということが重要。当ビジョンからは、そのメッセージが強く伝わってくるので、非常に心強いし楽しみである。

(鹿児島県茶業青年の会・前原委員)

前回代理で出席した副会長から、生産者の視点に立ったビジョンの重要性を伝えたが、今回それがしっかりと反映されていると感じた。

3ページの「(3) てん茶・有機栽培茶の生産効率化」について、苗木事業者の視点からいうと、以前からすると苗の普及は減ったが、現場では、後継者により「有機栽培に適した優良品種」を残していこうという動きもあり、こうした次世代へ資産を引き継ぐための投資は重要と考える。

次に、4ページにせん茶工場の老朽化対策や集約化などに目を向けて記載いただいたのは、機械トラブルなどの対応で苦慮する現場の身としてはうれしい。

次に、省力化・人手不足対策に関連して、労働力の確保と同時に「安全管理(リスクマネジメント)」の視点が極めて重要であると考えている。

機械化や大型化が進む一方で、操作ミスや転倒などの労働災害リスクは高まっており、足場の悪い傾斜地での機械作業は、事故に直結するので、生産現場の基盤整備や安全対策への補助、注意喚起といった視点も盛り込んでいただきたい。

最後にブランド戦略・輸出について、

先日、ミュージアム知覧を訪れた際、鹿児島は、他県と比較して「海外(輸出先)との距離が地理的に非常に近い」という強みが記載されていた。

輸出をさらに促進していく上で、こうした分かりやすいキーワードとして発信できれば、次世代を担う子供たちや、我々生産者自身の意識改革にも繋がると考えている。

（鹿児島県茶商業協同組合・岡村委員）

4 ページの「(4) 加工・流通施設の整備および物流の効率化の推進」について

茶商として、お茶の品質を保持するための保管施設の老朽化や不足が大きな課題となっていることから、倉庫（集出荷貯蔵施設）整備支援の記載をいただいて感謝。

また、「せん茶施設の再編・集約化」については、茶商としてもせん茶の「仕上げ加工施設」が老朽化してきていることから体制を見直す時期にきている。

次に、5 ページの「5 消費拡大・文化」について、

毎年 11 月 23 日の「お茶一杯の日」では小学生を対象としたお茶の淹れ方コンテスト「T-1 グランプリ」の開催している今年は数年ぶりのリアル開催となるが、「お茶一杯の日」のメイン会場と周辺を連携し、より多くの方に足を運んでいただけるような仕掛けを準備している。資金面や人手の課題はあるが、この「お茶一杯の日」に合わせて、県内各地域（各産地）が一斉にお茶のイベントを開催できるようなムーブメントにしていければ、「かごしま茶」の認知度はより高まると考えている。

（鹿児島県茶商青年団・西委員）

「T-1 グランプリ」については、子供たちが生き生きとお茶に向き合う姿を多くの方に見ていただきたいという思いがあるので、開催に向けてぜひ協力をお願いしたい。

資料の 4 ページの「○ てん茶・有機栽培茶など「かごしま茶」の更なる高品質化」は、茶商として最も重要な要素と考えている。

現在、国内外でてん茶の需要が非常に高まっているが、品質を評価する茶商としてもスキルを上げていく必要がある。

また、お茶は嗜好品のため、輸出先（海外の国や地域）によって求められる風味や味わい、ニーズが異なり、「味は淡泊だが色がよいもの」「ナッツ感のあるもの」といった現地消費者のリアルな声を、生産現場へいかに迅速にフィードバックできるかが重要である。

さらに、国内における「かごしま茶のブランド化」についても、よりスピード感を持って進めていくべきだと考える。

海外における抹茶市場は、現在の 8,000 億円から 1.4 兆円に伸びるといわれている中、今後、外資系企業が資本力を元に参入したときに、県内茶商は県内のお茶を買うことができるのかというリスクを考えながら、そのリスクを回避する行動をとっていかねばならないと考えている。

（公益社団法人鹿児島県貿易協会・上永田委員）

前回の委員会の意見を丁寧に形にいただき感謝。

特に、「4 輸出（の促進）」を本計画の大きな柱の一つとして位置付けていただいた点は、非常に意義深いと考えている。

5 ページの「5 消費拡大・文化」の項目において、ティーペアリングとの記載があるが、これは海外輸出を検討する上でも非常に有効な手法であり、「かごしま茶」と、鹿児島県が

強みを持つ他の農林水産物（畜産物、焼酎、スイーツ等）とを掛け合わせる（ペアリングする）ことで、新たな販路開拓につながると考える。

また、先ほどの「本県と海外の距離の近さ」や「海外市場の声を生産者へフィードバックするべき」との御意見には同意する。

最後に、7ページの「目標値」についての質問だが、「輸出目標額」の内訳として「抹茶輸出額」があるが、個別に設定していく方針か。

（坂口かごしま茶振興監）

抹茶輸出額目標については、貴見のとおり、個別に設定する方向で考えている。

（独立行政法人日本貿易振興機構鹿児島貿易センター・石橋委員）

ジェトロにおいて、海外パイヤーの招致や、海外現地での試飲会・商談会を支援する中で、鹿児島県以外の地域やお茶以外の商材を見ているが、実際に商談が成立するのは、自分たちの商品がどういったものか、また、単にお茶を売るだけでなく、「どのような環境で、どのようなこだわりを持って作られたのか」という「ストーリー（背景）」をいかに分かりやすく、かつ説得力を持って現地で語れるかが重要になる。

質問が2点。1点目は、2ページの「県内仕上げ茶比率3割」に対し、将来的な「仕上げ茶比率の向上目標」は設定されているか。

2点目は、荒茶で他県へ出荷されたお茶は、最終的に「かごしま茶」として販売されているか、また、販売されていないのであれば、もっと原料供給をしていることをアピールしてはどうか。

（特定非営利活動法人日本茶インストラクター鹿児島支部・長船委員）

5ページの「5 消費拡大・文化」の中に「簡易・簡便化志向に対応した喫茶法の提案」という視点を、より明確に記載してはどうか。

前回委員会資料の輸出関係において欧米などでは粉末茶が多く、台湾などはリーフ茶が多いとの記載があった。これは、欧米は湯に溶かして気軽に飲めるお茶として粉末茶が受け入れられた地域であり、台湾は元々リーフ茶を淹れる習慣（喫茶習慣）がある地域であることが関係していると思う。

このことから分かるように、ライフスタイルや食習慣に合わせた商品提案が不可欠であり、特に、国内においても「急須がない」「お茶を淹れるのが面倒」という簡便化志向が進む中、簡単にかつ美味しく飲める「ティーバッグ」を用途によって大きさ（量目）の異なる商品の開発・提案が重要と考える。

また、学校教育における「お茶の淹れ方教室」について、学校教育だけでなく、社会人向けの講座など、対象を広げていくべきと考える。

これが、骨子における「かごしま茶」の魅力を発信する人材の育成ということで、お茶の産地である鹿児島だからこそ、「かごしま茶の歴史や淹れ方など」を語れるようになること

は、最大のブランド発信になる。

最後に、目指すべき姿に記載されている「かごしま茶の『強み』を活かし」という表現について、この「強み」という言葉は本文中に1つしか出てきていないが、計画の全体を通して、この「鹿児島島の強み」とは具体的に何を指すのか。

（鹿児島県立短期大学・木下委員）

4 ページのかごしま抹茶の定義について、

日本茶業中央会の緑茶の表示基準や ISO で「抹茶」で議論されていると思うが、鹿児島として独自の定義を設ける方針なのか。また、かごしま標章茶のような品質を担保するものなのか。

次に、5 ページの「かごしま茶一杯の日（毎月 18 日）」について、「18 日」とした理由や根拠（語呂合わせや歴史的背景など）があれば教えてほしい。お茶の業界ではいい葉っぱとして 1188 が使われることが多いですが、18 日になった背景をお伺いしたい。

また、7 ページの「目標値（指標）」に関連して、前回の「かごしま茶未来創造プラン」に盛り込まれていた「小学校におけるお茶の淹れ方教室の実施率」という指標が、今回の今回の目標からは外れている。

消費者教育や食育、将来的な需要拡大の観点から非常に重要な指標であるため、可能であれば、今回の計画の指標（KPI）の中にも引き続き残してほしい。

4 ページの「フリーズドライ緑茶」について、

これは非常に画期的で、お茶を淹れるのが難しい海外市場などにおいても、簡単に本物の味と色を再現できる優れた技術であり、鹿児島独自の強み（知財）になると期待している。

しかし、現場の加工業者の方に話を伺うと、大隅の加工センターなどの特定の施設に自社の社員が 4 人も付きっきりで 4 日間も作業を行う必要があり、量産化（商業化）のハードルが非常に高いと聞いているので、利便性を上げていただきたい。

6 ページの観光業と連携したティーツーリズムについては、国内外の消費者だけでなく、海外バイヤーも対象にしてほしい。

同じく 6 ページの人材育成の部分では、以前、県茶生産協会が主催で栄養教諭や家庭科教諭を対象にしたかごしま茶の授業を実施していたと伺っているが、是非復活してほしい。農林水産省の第 5 次食育推進基本計画でも大人の食育について記載されている。小学校のお茶のいれ方教室も引き続き継続した上で、大人に対する茶育も取り組んでほしい。

（坂口かごしま茶振興監）

皆様、様々な視点から大変貴重な御意見・御質問に感謝。

光村委員から御意見いただいた需要予測については、現在作成中であり、国内・海外で分けることができるかも含めて検討させていただきたい。

田原委員から御意見いただいた労働力不足への対応について、当方も同じ認識を持っているところだが、入国管理等の簡素化などの手続きに関する内容については、当ビジョンへ

の記載は難しいと考えている。一方、生産性については、御指摘のとおり機械化だけでなく、技術的アプローチも重要と考えることから、3ページの研究開発において、機械だけでなく栽培法などの記載を検討させていただきたい。

前原委員から御意見いただいた、農作業安全の観点、自然災害等に強い生産体制の強化の中で読めればと思っている。骨子ではなく、本文で記載していきたい。

吉野委員から御意見いただいた、てん茶とせん茶のローテーション技術については、2の需要に応じた茶生産の推進のうち、てん茶や有機栽培茶など「かごしま茶」の更なる高品質化に向けた栽培・加工技術の向上に包含されるものと考えている。

木下委員から御意見いただいた「かごしま抹茶」の定義化については、ISO や日本茶業中央会の緑茶の表示基準で示された内容を遵守しつつも、曖昧な部分や、決まっていないことがあるため、本県独自で定義化するものところ。また、「フリーズドライ緑茶の利便性・実用化」については御意見として承り、関係部局へ共有したい。

吉野委員、田原委員より御意見いただいた「クリーンなかごしま茶」については、生産者をはじめ皆様の御努力下、このイメージをつくってこられたところ。その代表的例として、GAP や HACCP、ISO などの各種認証制度を記載したところだが、明示的に表現するかは検討させていただきたい。

吉野委員、石橋委員より御意見いただいた、「かごしま茶のブランド化」に係るストーリー性については、5ページの輸出の項目に記載しているが、4ページの「3(1) 国内外ブランド化」の項目にないところであり、国内についてもストーリー性の可視化によるブランド化は重要であると考えているので、盛り込む方向で検討したい。

長船委員から御意見いただいた「ティーバッグの商品開発」について、ティーバッグは確かに簡易・簡便化志向で包含しておりますが、提案だけでなく、開発という観点は重要と考えますので検討させていただきたい。

木下委員から御意見いただいた「かごしま茶いっぺの日（毎月18日）」は、「いっぺ」の標準語である「いっぱい（18）」の語呂から引用している。

長船委員から御意見いただいた、お茶の入れ方教室の対象を社会人もという御指摘については、社員研修等の「等」に社会人講座も包含していると御理解いただきたい。

長船委員から御意見いただいた、かごしま茶の「強み」の定義については、生産量、産出額、品質、有機茶園面積、てん茶生産量などが日本一と記載させていただいているが、鹿児島県の強みである、高い機械化率による低コスト生産、豊富な品種ラインナップ、早期取引が可能な地理的条件、クリーンなお茶づくりなども強みと考えている。

石橋委員から御意見いただいた「仕上げ茶比率」および「目標設定」については、現在、「仕上げ茶出荷額（現状値：99億円）」という指標を設けており、これは、県内での仕上げ茶比率を引き上げた結果として県内からの出荷額が向上するというところで整理したところ。

さらに、木下委員から御意見いただいた「お茶の淹れ方教室の実施率」の指標化については、現在も小学校への普及活動を進めているが、今回、消費量でも日本一を目指すという広い観点から「県民（鹿児島市）1人あたりのお茶の購入数量・金額」といった指標としたと

ころ。

（鹿児島県経済農業協同組合連合会・吉野委員）

資料6ページの「(3) かごしま茶の魅力を発信する」のうち、「情報発信施設の活用」について、計画には「既存の情報発信施設の活用等」と書かれているが、これは「既存の（かごしま茶流通センターなどの）施設を有効活用する」というだけの意味に留まらず、より本格的な「かごしま茶のフラッグシップ（情報発信の拠点）」となるよう、本格的な「茶のミュージアム（博物館・体験型施設）」の整備を視野に入れてほしい。

特に、日本一の生産量を誇る産地として、かごしま茶の魅力（歴史、品種、淹れ方、効能など）を体系的に学び、体験し、発信できるような拠点が、鹿児島には不足している。

観光客や海外のバイヤーが訪れた際に、そこで実際に美味しいお茶を飲み、子供たちがお茶の淹れ方を体験し、商談もできるような、総合的な「茶の拠点施設」の整備が必要。

こうした「拠点」の必要性について、将来的なビジョン（あるいは夢）として計画に盛り込んでいただけないか。

事務局（質問に対する回答および補足）】

（坂口かごしま茶振興監）

かごしま茶の情報発信ということは非常に重要だと考えている。我々としては、このかごしま茶流通センターが情報発信施設を担っていただいていると理解しており、その機能が十分に発揮されることを期待している。

（大平委員長）

吉野委員の情報発信施設についての御意見については、骨子案においても、整備ではなく活用と書いてあるところなので御理解いただきたい。

骨子案については、重複している箇所もみられるので、ビジョンの本体作成にあたっては整理いただきたい。

第3回委員会では、今回の御意見等を踏まえ、需要予測や目標数字なども合わせて御議論いただくので継続的な御協力を願う。

（坂口かごしま茶振興監）

今後のスケジュールについては、10月中旬を目途にパブリックコメントを1ヶ月程度実施し、その御意見等も整理した上で、12月中旬を目途に第3回検討委員会を開催する予定。